「後日談-ブラックアウト」
～先生と媚薬と出られない部屋。バッドエンド～
※当おまけＳＳは作品、キャラクターに関するネタバレが多分に含まれています。本編視聴後及びおまけＳＳ０１～０５の閲覧後にお楽しみいただくことを推奨致します。
※精神的嫌悪感を与える内容が含まれています。現実と虚構の区別がつかない方、精神的に弱っている方の閲覧はご遠慮ください。
※ＩＦルートです。

僕はどうもおかしくなってしまったらしい。
上手に呼吸ができない。頭が痛い。吐き気がする。
「はぁ…はっ…は…っ」
僕はどうにもできず、ベッドでのたうち回る。
孤独な部屋で一人、さながら毒虫のようになっていた。
「僕に兄はいても、世話をしてくれる妹はいないからなぁ…」

体調が優れない時の悪い癖だ。昔読んだ小説のストーリーを脳内で映像化し、気を紛らわせる。それが明るい物語ならまだ救われるのだろうが、決まって暗い物語だ。
「あれってラストどうなったんだっけな…」
回らない脳みそを動かそうとするも。
「あは…っははは…はは…っ」
僕はついついあの子の泣き顔を、思い出してしまったのだ。

*

僕はあの部屋から出られた後、車であの子を家に送り届ける運びとなった。
「家ってどこかな？もしよかったら…住所、カーナビに打ち込んでくれる？」
あの子はたどたどしい動作で住所をナビに打ち込む。僕が車を走らせている最中、あの子はずっと顔を俯かせていた。
「どうしたの？気分…悪い？」

あ、いえ、と小声で彼女は言う。
赤信号。僕は車を停止させ、彼女の顔を威圧感を与えないよう横目で見た。彼女は唇を数回パクパクと動かしたと思うと、ギリギリ聞き取れるくらいの声で。
あんなことが起きて、平気でいられるわけないじゃないですか。
心臓が止まったかと思った。そりゃそうだ。平気でいられるわけない。きっと性的な経験なんて、あれが初めてだったのだろう。セックスはおろかキスだって、経験が無かったかもしれない。
「僕からこんなことを言うのはとてもあれだけど…今回の件は僕のことを嫌いになっても、それこそ殺したいくらい憎くて恨んだとしても、しょうがないことだと思うよ」
彼女は今にも泣き出しそうな顔をして、スカートを握る。
「君に死ね、と言われても僕はただその言葉を受け止めることしかできないよ。本当に、本当にごめん」
僕は素直に謝る。

私は。

先生のこと、何とも思っていませんから。
死ねとか、嫌いとか、好きとか、何も思ってませんから。
あなたはただの保健室の先生。それだけです。

彼女がやっとのことで絞り出した言葉だった。

「そう…」

「本当にそう思ってる？」
追いつめるつもりは毛頭も無かったのだが、どう考えても本心で喋っているとは到底思えなかったのだ。

彼女は肩を震わせる。

しょうがない状況だったじゃないですか。
拒めるわけ、ないじゃないですか。
先生のことをいくら嫌いになろうが、どうしようもなかったじゃないですか。
私が傷つくことで丸く収まったんです、それでいいじゃないですか。

とうとう彼女の目から、涙が堰を切ったように流れ出した。

このまま真っ直ぐ進めば彼女の家だった。だが僕は無言でハンドルを切る。彼女は特に何も言わない。それどころじゃないのだろう。気を回せる程落ち着けるわけもないのだ。妊娠してしまいかねない行為をされ、あまつさえ僕の弱い部分をさらけ出されて、平常心でいられるわけがないだろう。
(責任くらい取るのに)

僕が車を走らせた先は彼女の家の近くにある公園だ。この公園に訪れるのは二度目だ。駐

車場に車を止め、エンジンを切る。まだ彼女は泣いたままだ。これはいけない、早く泣き止ませなければ。僕にだって情くらいあるのだ。

「君がそんなに泣く程辛いのなら……」

僕は白衣のポケットに手を突っ込み、手慣れた動作でそれを握る。

「……」

「……？」

彼女は涙を流しながら、僕の言葉の続きを待つ。

「僕のことを殺してしまえばいい」

握ったものを彼女の手のひらに乗せ、握らせる。彼女は潤んだ目を白黒させ、握ろうとしない。

「僕はそれで構わないよ」

彼女が一向にナイフを握ろうとしないものだから僕は痺れを切らしてナイフを展開させて、もう一度無理矢理彼女にナイフを持たせた。

「やり方が分からないってわけじゃ、ないでしょ？」

彼女は首を小刻みに横に振り、嫌、嫌…と小さく呟いた。僕は彼女の反応なんて気にせず、

白衣の袖を捲り彼女の手を引いて刃先を僕の左腕に触れさせた。
「僕が君を傷つけてしまったんだ、君が僕を傷つけてしまって何の問題があるのかな」
彼女は逡巡しているのか、そもそもする気もないのか…。刃先が皮膚に食い込み血が滲んできてはいるが、僕がいつも一人でしているリストカットに比べたら蚊に刺された程度の痛みだ。
「君がしないなら、僕が代わりにしてあげようか」
彼女の腕を自分の身体側にゆっくりと引き、徐々にナイフを食い込ませる。みるみるうちに出血していく。手のひら、手の甲、指になま暖かい液体が伝っていく。不思議と痛みは感じなかった。
「大丈夫、こんなくらいじゃ死にやしないよ。少なからず君にその気がないなら、ね」
彼女の顔は恐怖で染まっていた。何故なんだろう。別に自分がされているわけではないのに。自分が殺されるわけないのに。おかしな子だ。
「こんなに血が出てても全然痛くないんだ、不思議だよね」
刃先が僕の腕に数センチめり込んだ。人間の力じゃ、片手じゃ、これが限界だ。貫通させるなんて無理だ。脂汗が額に浮いてくる。痛みは然程感じてはいないが、肉体的には大きなダメージなのだろう。徐々に彼女の手とナイフを握っている右腕が痺れてきた。僕は右手

の力を緩めて、ナイフを抜く。傷口からゆっくりと僕の血液が流れ出す。こんな風景、僕にとっては見慣れたものだからなんとも思わないのだけれど、彼女にとっては相当刺激的だったようで今にでも気絶してしまいそうな程に青ざめた顔をしていた。
「これ、次は腕じゃなくて……」
彼女の手と手首を、今度は両手で握る。勿論、ナイフは握らせたまま。
「僕のここ…」
刃先を、左の鎖骨から拳一つ分下の部分…心臓に向けた。
彼女は小さく悲鳴を上げる。かわいらしい。純粋な人間というのはこういう反応をするのだ。それに比べて僕の動じなさ…いや、動じてはいるのか。好奇心が。わくわく、どきどき。心臓の鼓動がうるさい。どうしてか笑みが止まらない。
「刺して」

バンッ。
彼女は慌てて助手席のドアを開ける。

もう私に関わらないで！

彼女はそのまま自分の家に向かって走っていってしまった。
僕は追いかける気力なんて無かった。

*

あれは明確な拒絶だった。
「じゃあこれは何だったのさ…」
左腕の絆創膏を見る。傷に絆創膏が貼られてはいるものの、僕と彼女が新しく作った傷跡が大きすぎて霞んで見える。
「野良猫に餌をやっちゃダメな理由、彼女は知らないのかなぁ」
とりあえず今の僕にできることは二つ。
精神的に落ち着くまで仕事を休むこと、薬はちゃんと飲み続けること。

僕は薬のシートを手に取り手のひらに錠剤をぶちまけ、水を飲まずラムネ菓子のようにして食べる。ぽりぽりぽり。僕しかいない空虚な部屋に小気味良い音が響く。

「ああぁ……」

口から重たい息が流れ出る。

「もう本当に無理、考えたくない、最悪の結果しか見えない、何で僕はあそこで調子に乗ったんだ？あそこで僕が耐えていれば、もしかしたら彼女は何かしらのタイミングで僕に振り向いてくれていたのかもしれないのに、どうして堪えきれなかったんだ？僕なんか大嫌いだ、死んでしまえばいいのに。ろくな人生を歩めていない僕にだって、年齢だけは重ねてきたんだ、最適解だって導けたはずなんだ、それなのに、どうして…どうして？僕は、さぁ…！」

いつの間にか僕はナイフを持っていた。ナイフを持った左手に力が入る。

僕は妙なこだわりで、「リストカットをする時は必ず利き手ではない方に傷をつける」。理由は至ってシンプル。「仕事や生活に支障が出たら困るから」だ。

でも。
「……ッ！！」
今日のこの時ばかりはそんな考えなんて頭になかった。
ただ、心の痛みから逃れるように、忘れられるように、新たな痛みで上書きをしていた。とはいえ、右腕は右腕で自分で作った痣まみれ、根性焼きまみれなんだけれど。切り傷が一つも無かったからとても目立つ。
「いったーい」
痛みなんて全然無いくせに。
「もー誰ー？この傷作ったのはさあー」
茶番だ。
「こんなことして死んだらどうすんのさー」
こんなたかだか一本の切り傷で死ぬわけなんてない。例え血管が切れていたとしても、多少貧血になる程度で済むだろう。それこそ、傷口を水に漬け続けていたらどうかは分からないが。
「もーやめてよー本当に…さっ！！」
左腕に力を込め、そのまま右腕に向ける。右腕は逆らうことなく真一文字を刻まれる。

「もーいったいんだからねー」
いつまで一人芝居を続けているのだろう。

誰にだって越えてはいけない線、どうやったって越えられない線はあるのだ。
今の僕はそれを裕に越えている。自覚がある。

「僕さぁ、偉いと思わない？自分のことはこんなに、ボロボロに傷つけるくせにさ」
「君のことを切ったり刺したりなんてしないし、したいとも思わないんだよ」
「大事にしたいんだよ」
「君に向けている感情を、少しでも、一部でも、自分自身に向けられたら良かったのにね」

一体誰に聞かせているんだ、この言葉は。

「もう一人は嫌だよー」
「僕の隣に、何であの子はいないのかなぁ」
「やだよー……あは…っあは、あはは…」

「あは、あは、あははは…」
僕が普段服用している睡眠薬を手に取る。
「僕が平然とした顔でこれをお茶に混ぜて、気を失わせてさあ」
「閉じこめたい、独り占めしたい、絶対に僕のものにしたい」
「何で今までしてこなかったんだろう？」

理性も倫理感もとうに崩れ去っていて。

「もう僕、失うものなんて君くらいなんだよ…」